座敷と茶の湯

佐藤　豊三

一　喫茶の起源と世界への伝播

茶の原産地は、中国雲南省西南部とされる。中国神話には、今日の漢方薬の基礎を築いたと伝えられる神農帝が解毒として茶の葉を用いたという。

茶に関する最初の記録、紀元前五十九年、前漢時代に記された王褒（おうほう）の『僮約（どうやく）』僮（使用人）の契約書

「茶（と）を烹（に）る」（苦菜にがな・茶）

「武陽で茶（と）を買う」

王褒のいた場所「益州」

現在の四川省（雲南省の北）成都市東北の広漢県

茶を購入した場所

「武陽」四川省彭山県。武陽は眉山茶（峨眉山）の産地。

★『広雅』（三国の魏（二二一～二六五）の張揖の撰）には、「荊（湖北省）巴（湖南省）の地方では、茶の葉を採（つ）んでついて餅状にする。老（た）けた葉は餅状にするのに米膏（のり）をいれる。茗（ちゃ）を煮て飲もうというときは、その餅茶を先に炙って赤色にし、搗いて末（こな）にし、瓷器のなかに置（い）れ、湯を澆（そそ）いでこれに覆（ふた）し、葱・薑・柑子を＊くさ＋毛（まぜ）ぜる。それを飲めば酒を醒まし、眠らせない。」

茶の字　古くは、荼（と）・茗（めい）・草＋舛（せん）・檟（か）

清時代初期の顧炎武（一六一三～八二）によれば、陸羽より二百年以上も前の梁時代（五〇二～五七）にすでに茶という字形があらわれたという。魏の時代　魏は北朝、梁は南朝　↓↓のち「随」

CHA と TEA　CHA　四川省成都　陸路シルクロード　中央アジア・東欧

TEA　広東省広州　海路　マラヤ・インド洋・大西洋・西欧

二　中国の喫茶法

唐代に陸羽の『茶経』（八世紀）に、記された喫茶法は、団茶餅茶・炙る・薬研・粉茶・煮出すという、団茶法であった。

宋代の蔡襄の『茶録』（十一世紀）にある喫　茶法では、団茶・あぶる・薬研・粉末・撃払（茶匙で）が行われ、徽宗の著した『大観茶論』（十二世紀前　期）では「茶筅」が用いられ、碾茶（抹茶）法である。明時代になると、碾茶法は廃れ、煎茶が広まった。

三　日本の喫茶の歴史

A　平安時代

★『日本後紀』弘仁六年（八一五）四月二十二日の記事に、近江国崇福寺永忠が嵯峨天　皇に茶を献じたとある。日本最初の茶に関する記事である。

★『日本後記』に、弘仁六年（八一五）四月　嵯峨天皇（七八六から八四二）に大僧都永忠（七四三～八一六）が近江の梵釈寺において茶を献じた。

「廿二日、近江国滋賀韓崎に幸す。便ち崇福寺を過ぐ。大僧都永忠、護命法師等、衆僧を率い、門外に迎え奉る。皇帝輿を降り、堂に上り、仏を礼す。更に梵釈寺を過ぐ。輿を停めて詩を賦す。皇太弟および群臣、和し奉るもの衆し。大僧都永忠、手自ら茶を煎じて奉御す。」

嵯峨天皇は同六月に、畿内および近江・丹波・播磨などの諸国に茶を植え、毎年献上することを命じる。

☆　日本漢詩集『経国集』・『文華秀麗集』に喫茶のこと詠まれ、宮廷サロンで喫茶が流行していた。

☆　弘仁五年（八一四）撰上の嵯峨天皇勅撰漢詩集『凌雲集』に「夏の日に左大将軍藤冬嗣の閑居院」と題された御製の詩の一節に「詩を吟じて厭わず香茗を搗く、興に乗じて偏に宜しく雅弾を聴くべし」　当時の上流階級が茶を愉しんでいる詩。

☆　宮中で　仏事の際には団茶形式による喫茶が行われた。（季御読経）

★『公事根源』一条兼良（一四〇二～八一）

「二月八月に大般若経を百敷にて講ぜらる。四ケ日の事にて、第二日には引茶とて僧に茶を給ふ事あり。天平元年（七二九）四月八日に始めらる。貞観の比ほひは、毎季行はれけるとかや。」

★『東大寺要録』に行基（六六八～七四九）が「諸国に堂舎を建立すること四十九ケ所、並びに茶木を植う」とあります。

☆　わが国においては、仏教の伝来とともに喫茶の風習を早くから受け入れたと思われ、奈良時代の『正倉院文書』に「茶（と）十五束」や「茶七把」などの文字がある。

B　鎌倉時代

★★『喫茶養生記』　承元五年（一二一一）、成立?。

★『吾妻鏡』の建保二年（一二一四）二月四日の条

「将軍家（実朝）聊か御病悩。諸人奔走、但し是れ若しくは去夜、御淵酔の余気か。爰に葉上の僧正（栄西）、御加持に候するの処、此事を聞き、良薬と称して、本寺より茶一戔召し進めらる。而して一巻の書を相い副え、之を献じ令しむ。茶徳を誉める所の書也。将軍家其の感悦に及ぶ。」

鎌倉三代将軍・源実朝が二日酔いに　悩んでいた折に栄西は一　杯の茶を進め、同時に『喫茶養生記』　も献じた。

☆　禅宗寺院で茶礼が行われる。

禅院における喫茶儀礼は、宋の慈覚大師宗Ⅱ（臣責）が崇寧二年（一一〇三）に撰した『禅苑清規』に詳しく定められています。

喫茶儀礼のことを、臨済宗では「茶礼」といい、曹洞宗では「行茶」という。

☆　栄西が創建した建仁寺では、毎年４月20日の栄西の誕生を祝する法要（開山降誕法要）に「四頭（よつがしら）茶会」と呼ばれる茶会が開かれる。

☆　鎌倉時代末期から南北時代にかけて、唐物を用いた「茶寄合い」が盛んになる。（バサラの茶・闘茶）

★『喫茶往来』

まず客が来るとはじめに酒を三献、ついで索麺（そうめん）で茶を一杯、それから山海の珍味を出して飯をすすめ、さらに菓子などでもてなし、このあと庭を眺めたり、木陰で休息をとったりし、やがて茶会の開始にともない二階へ上がるが、内部の壁にはさまざまな仏画の類が掛けられ、堆朱など渡来品の工芸品もあり、また、賞品として提供される珍奇な品々がいろいろと並べられ、机には金襴を懸け、客は豹の皮を敷いた椅子に坐っているといった豪華なものであった。

闘茶は四種十服、つまり四種類の茶を十回ずつ飲んで茶の本非を区別し、より多く正解であった者が勝ちとなるというものでしたが、闘茶が終わった後は、美肴が出て酒を飲み、管弦により歌ったり舞ったりという宴会が深夜まで続いた。

三献・点心・茶儀・宴会

C　室町時代前期　座敷の茶が始まる

殿中茶の湯

足利将軍家を中心とするサロンで、押板（床の間）・違い棚・書院床で構成される「座　敷」が形成され、書院造り建築が出現する。そこに日本人の美意識をもとに選択された　唐物を用いた室内装飾形式（座敷飾り）成立する。この座敷から成立したのが、日本の伝統芸能と呼ばれる「茶・はな・香」である。

座敷　畳敷き・襖で仕切られる・天井がある・上段の間がある

押板・違い棚・書院床・茶の湯棚などの装置が設けられる

主要道具　唐絵・唐物の三幅対・三具足（花瓶・香炉・燭台）

★『北山殿行幸記』応永十五年（一四〇八）三月　後小松天皇を義満が北山邸に招く。

用いられた道具名から押板・違い棚・書院床があった可能性がある。

★『室町殿行幸御飾記』永享九年（一四三七）十月　後花園天皇が六代義教の室町殿に行幸

▼押板・違い棚・書院床・茶の湯棚などの部署に飾られた品物の名が記されている。この頃に「殿中茶の湯」が成立する。

★『南方録』（江戸時代前期成立。利休の言動を南坊宗啓が筆写した秘伝書を黒田藩家老立花実山が利休百年忌のころ編集）

義教は病気見舞いとして、禁裏から御園の茶とともに、鎌倉茄子茶入・花山天目・青磁雲竜水指の三種を下賜され、その三種を用いた茶の湯を行い、赤松前司貞村に茶を立てさせる。

『「貞村は時の寵臣、ことに才覚の人、茶式をも好みて、同朋達も及びがたきほどの茶人也、世にたぐひなき美男十七・八歳の比なり。折烏帽子に黒ユルシの水干にてたてられしと云う。此の手前を能阿弥の秘書に「三種極真のかさり」と題を付けたり』播磨・備前・美作守護の↓嘉吉の乱　嘉吉元年（一四四一）赤松満祐が、六代将軍足利義教を暗殺。

D　室町時代後期

草庵茶の湯

将軍家サロンで生まれた書院（殿中）茶の湯は、一般にも喫茶の風を広め、日本の伝統文化（王朝文化、和歌・物語の世界）と融合して、枯淡・侘びの境地（冷え枯るる）を求める「草庵の茶の湯」形式が出現する。そこでは、都市の中でありながら、深山幽谷にたたずむ庵を再現したような茶室を設けて用いた。その指導的役割をしたのが村田　珠光・武野紹鴎ら京都や堺の上層町人の人々であった。ここでは彼らの新しい美意識によって選ばれた和物や朝鮮・南蛮の品も用いられた。

▼「数寄（すき）」

▼「色葉字類抄」平安時代後期の辞書

すき・好き　感情＝恋愛・好色・芸能への傾倒

＝偏愛・執心→数寄

数寄＝数奇　数＝運命　奇＝異常

数奇な運命　おおくは不幸な運命

「すき・数寄」の対象に出会う（千載一遇）

会うは別れの初め。芸能で身を滅ぼす。

▼　室町時代になると、「数寄」の言葉は、音楽・和歌の世界から茶の湯の世界でも用いられる

「数奇」茶の湯の世界

茶具　茶の湯の具足（道具）

数寄屋＝茶室　小間・広間

数寄道具　「御数寄道具」

★「心の文」＝「古市播磨法師宛珠光一紙」古市播磨澄胤（一四五九～一五〇八）大和国の土豪、村田珠光の弟子。

此道、第一わろ（悪）き事八、心のかまんかしやう（我慢我執）也、こふ（功）者をはそね（妬）ミ、初心の者を八見くた（下）す事、一段無勿体（もったいなき）事共也、こふしや（功者）に八ちかつ（近づ）きて一言をもなけ（嘆）き、また、初心の物をはいかにもそた（育）つへき事也、此道の一大事八和漢之さかい（境）を

まきら（紛）かす事、肝要肝要、ようしん（用心）あるへき事也、又、当時、ひゑ（冷）かる（枯れ）ると申て、初心の人体かひせん（備前）物・しからき（信楽）物なとをもちて、人もゆるさぬたけくらむ事（＊物事を極めた最高の境地に至ること）、言語道断也、かるると云事ハ、よき道具をもち、其あちわ（味）ひをよくし（知）りて、心の下地によりてたけくらミて、後までひえやせ（冷痩）てこそ面白くあるへき也、又、さハあれ共、一向かなハぬ人体ハ、道具にハからかふへからす候也、（略）

★『禅鳳雑談』　世阿弥の女婿　金春禅竹の孫　禅鳳（一四五四～一五三二）の雑談をまとめたもの

一　珠光の物語とて、月も雲間のなきは嫌にて候。これ面白く候。

★☆紹鷗の侘び

『南方録』

紹鷗ノワビ茶ノ湯ノ心ハ、新古今集ノ中、定家朝臣ノ歌二、

見ワタセハ花モ紅葉モナカリケリ　浦ノトマヤ（苫屋）ノ

秋ノタグレ

コノ歌の心ニテこそあれと被申しと也、花紅葉ハ則書院台子の結構にとへたり、其花ももみぢをつくづくとながめ来りて見れば、無一物ノ境界浦のトマヤ也、

花紅葉ヲシラヌ人ノ、初ヨリトマ屋ニハスマレヌゾ、ナガメナガメテコソ、トマヤノサビスマシタル所ハ見立タレ、コレ茶ノ本心トイハレシ也、（略）

★『東野州聞書』東常縁　宝徳三年、一四五一年の条

藤原定家の春日同詠という懐紙が表装されて義政の御所で飾られた

★『実隆公記』享禄三年三月廿一日、紹鷗は三条西実隆から『詠歌大概』（定家の歌論書）の伝授をうける。

古今伝授（古今和歌集の解釈）。この時、紹鷗二十九歳、実隆七十六歳。和歌の世界と茶の湯の結びつき。

＊「古今伝授」　東常縁に起り、飯尾宗祇に伝わり、宗祇から三条西実隆を経て細川幽斎に伝えたものを二条派、宗祇から牡丹花肖柏に伝えたものを堺伝授、肖柏から林宗二に伝えたものを奈良伝授という。

☆　武野紹鷗茶会の最初の記録　『天王寺屋会記　他会記』天文二十四年、一五五二年の茶会記の中で、紹鷗が藤原定家の色紙を使っている

四　御物と名物

A　御物

a　古代中国　王の所有物

『史記』　漢の司馬遷の撰　「呉王嚊（さんずい、ヘイ・）伝」に「焼宗廟、鹵御物」

b　日本　平安時代　天皇の所有物

『三代実録』巻四十五　元慶八年（八八四）二月二十三日の条、光孝天皇の即位記事中に「天下給侍留老人尓賜御物布」

『江家次第』　天永二年成立　巻八　「同（七月七）日払拭御物事」の条がある。風入れ。

c　室町時代

『蜷川親元日記』　寛正六年（一四六五）年正月二日の条

「御成始（中略）御物奉行蜷川彦左衛門」

同年三月四日の条、「若王子江御成　御輿也、御物奉行蜷川式部

同新右衛門、御長持一色、常御直垂御大口御腰物火打袋付」

★『宗五大草紙』伊勢流故実書　室町後期

「御物に成り候太刀銘」

★『御物御画目録』の奥書　「右目録者、従鹿薗院殿已来御物、御絵注文也、能阿弥撰」

★『多聞院日記』文明十六年（一四八四）四月十一日の条

「四補（幅）対曜卿之筆、外題ハ能阿弥自筆ニ沙汰之揮之、是ハ公方御物」↑↓「禁裏御物」

★『君台観左右帳記』東北大学本　永正八年（一五一一）

「公方御物」

★d　桃山時代以降の御物

『天王寺屋茶会記』「宗及他会記」

元亀二年（一五七一）三月四日

一　ミツシタナ所持候、代金壱枚、此棚ハ、東山殿之御物也」

★『山上宗二記』「大壺ノ次第」の部、「松島」「四十石御壺」

の条に「東山殿御物」

e　江戸時代

★『玩貨名物記』万治三年（一六六〇）刊行　「東山殿御所持」

f　昭和十一年創元社刊　『茶道全集』第十巻「茶道用語解説」

「東山御物」の語の初出

「東山御物　ヒガシヤマゴモツ　足利義政の宝庫に秘蔵されたる書画骨董及び茶器をいひ、主として明国将来の物」

☆　「柳営御物」

柳営　本来は幕府のこと

「柳営御物」徳川将軍家御物

B　名物

唐物茶壺　銘　松花

・・・・道具名　プラス　銘　（銘は、本来は名である）

「銘」・・・しるす・かきつける・きざみこむの意がある。

（金石の刻文。金属器や石器に刻み込まれた文字。

刀剣の茎に刻み込まれた「銘」）

★この本来の意味を持った「銘」と「名」が混同されて、本来の「名」であるものまでも「銘」と記される習慣が出来上がる。

d　器物の名称を「名」を冠して呼ぶ起源は神話に溯る

ア　古代　「八咫鏡」「八坂瓊曲玉」「草薙剣」

イ　平安時代・・平家累代の刀剣「小烏丸」「抜丸」。

馬の「生食（いけずき）」「摺墨」

★『枕草子』九十三段

「御前にさぶらふものは、御琴も御笛も、みなめづらしき名をつけてぞある。玄象・牧馬・井手・渭橋・無名など、また、和琴なども、朽目・塩竈・二貫（ぬき）など・・」

★　ウ　南北朝時代・・香木　佐々木道誉所持「百八十種」。

『平家物語』琵琶「青山」

『異制庭訓往来』二十種の香銘。

C　茶の湯道具に与えられた名物

★『看聞御記』応永二十四年（一四一七）七月二十日の条

「良明房参。殊畏申。名壺献之。」。

同書　永享二年（一四三〇）四月二十八日の条

「奥御会所（略）円壺　号安計保乃　盆一　削紅。」（足利六代義教将軍から後花天皇への献上品）

★『満済准后日記』永享六年二月四日の条

「葉茶壺　九重ト号名物。」、「号」＝名、号＝名物」の出現

五　信長の名物狩り

★『信長公記』　巻二　永禄十二年四月（の項）

然而、信長、金銀・米銭不足これなき間、此上は唐物、天下の名物召置かるべきの由、御諚候て、先上京

大文字屋の　一、初花

祐乗坊の　一、ふじなすび（富士茄子）

法王寺の　一、竹さしやく（茶杓）

池上如慶が　一、かぶらなし（燕無花生）

佐野　一、雁の絵

江村　一、ももそこ（桃底花生）

以上

友閑（松井）・丹羽五郎左衛門（惟住　長秀）御使申し、金銀・八木遣し、召置かれ、天下定目仰付けられ、

六　千利休の侘びの茶の湯

珠光・紹鷗の茶の湯形式をさらに推し進めたのが、千利休である。利休は、織田信長・豊臣秀吉の「茶頭」として、武家の茶の湯を指導するとともに、禅宗思想を精神的拠りどころとする「侘びの茶の湯」を目指した。

「茶道」

七　桃山時代から江戸時代

☆　武家茶の湯

利休以後、江戸時代初期には「武家茶の湯」を指向する古田織部・小堀遠州の流れと、千家の「侘び茶の湯」に大きく分けられるが、片桐石州は、武家茶の湯に侘びの茶の湯を採り入れた石州流を成立させている。

☆　千家の茶の湯

千宗旦（天正六年～万治元年　一五七八～一六五八）

父は利休の後妻千宗恩の連れ子千少庵、母は利休の娘お亀。少庵の京千家を継いだ。千家三代。宗旦流（三千家）の祖。宗旦は、十歳の頃に大徳寺に喝食として預けられ、春屋宗園のもとで禅の修行をつみ、得度した。文禄三年（一五九四）千家再興（利休、天正十九年　一五九一）が叶い、還俗し、弟子らとともに利休流のわび茶の普及に努めた（還俗の時期については諸説ある）。この際、秀吉が利休から召し上げた茶道具を宗旦を名指しして返したことから、伯父道安（利休長男）ではなく宗旦が利休の後継者と目される（『茶話指月集』）。慶長五年（一六〇〇）頃、少庵が隠居し家督を継ぐ。宗旦は、利休の事例から生涯仕官をせず、茶風は祖父利休の侘びの茶の湯をさらに徹底させ、ために乞食修行を行っているように清貧であると言う意味から、「乞食宗旦」と呼ばれた。

だが、子供たちの仕官には熱心で、長男宗拙を加賀藩前田家に、次男一翁宗守（武者小路千家初代・官休庵）を高松松平家に、三男江岑宗左（表千家初代　不審庵）を紀州徳川家に、四男仙叟宗室（裏千家初代　今日庵）を加賀藩前田家に仕えさせた。宗旦晩年に建てた一畳台目（約二畳の広さ）の茶室（不審庵）は、侘び茶の精神を表した究極の茶室とされている。

日本での喫茶の風は、表だっては自らが抹茶を用いて心身が潤う事を目的とするよりも、応接に際して茶でもてなす事に主眼が置かれていた。しかしながら、江戸時代初期　頃から煎茶が、広く一般に広まり、日常生活の中で、自己で茶を喫する風が定着した。